



## 5.FD 宿泊研修

# 平成24年度FD宿泊研修記録





## 平成 24 年度 FD 宿泊研修

全体テーマ：大学における主体的な学びとは

開催場所：二本松市岳温泉『あづま館』

開催日：9月29日～9月30日

### (1)スケジュール

1 日目：9/29 (土)

11:30 開会行事

13:00～13:15 〔第1セッション〕研修の流れと目標設定

13:15～14:15 〔第2セッション〕レクチャー

テーマ：「今大学教育に何が求められているか 中教審答申を中心に」

14:30～16:10 〔第3セッション〕グループワーク

統一テーマ：「大学における主体的な学びとは」

サブテーマ：

大学で学ぶ力を身につけさせる初年次教育とは

教育・学修効果を高める授業アンケートとは

学生の相互作用を促す学修環境とは

16:40～18:10 〔第4セッション〕報告資料作り

2 日目：9/30 (日)

9:00～10:20 〔第5セッション〕報告

10:30～11:50 〔第6セッション〕報告

13:00～13:30 〔第7セッション〕ふり返りと共有

13:30 閉会行事

参加者：教員8名、職員7名、学生12名、合計27名。

## (2)グループの議論のテーマ・内容

### 1班

メンバー：

学生...柴田敬一、小林友美

教職員...入戸野修、笠井博則、早坂美春

テーマ：学生の相互作用を促す学修環境とは

### 2班

メンバー：

学生...武田吉之助、荒川桃子

教職員...飯島充男、村上寛和

テーマ：学生の相互作用を促す学修環境とは

感想：

### 3班

メンバー：

学生...関澤諒、糠澤摩美

教職員...牧田実、木村勝典、佐々木敬規

テーマ：大学で学ぶ力を身につけさせる初年次教育とは

### 4班

メンバー：

学生...岡部裕己、稲見尚

教職員...高橋由貴、岩下悟士

テーマ：大学で学ぶ力を身につけさせる初年次教育とは

### 5班

メンバー：

学生...青山孝太郎、荒木紗友理

教職員...増田正、菅野晃

テーマ：教育・学修効果を高める授業アンケートとは

### 6班

メンバー：

学生...齋藤真吾、関原瑞穂

教職員...丸山和昭、横山雄司

テーマ：学生の相互作用を促す学修環境とは

### (3)参加者の感想

人間発達文化研究科 1年 柴田敬一

多様な思考からの考察を経て、目標の明確化を促進し、方法・工程を考えるとというラインの引き方に気がつきました。

いわゆる自分一人でもワークショップ方式で問題解決出来る事に大きな意味がある様に思います。

FD合宿は、初年次教育のガイダンスやオリエンテーション後に半日とか1日の継続的な機会を作る事によって、よりステップ up したナビゲーションになるのではないかと思う。

共生システム理工学類 2年 小林友美

今回は「主体的」という言葉が中心におかれた話し合いだったと感じました。自分が話し合った学習環境について、特に自分の時間の管理などは、前期の生活を見直すことによって出来そうなのでやってみようと思いました。

共生システム理工学類准教授 笠井博則

意見を言う機会は多かったが、学生の話聞きだすことはあまりうまくいかなかった。

「やる気がない人」向けの環境整備は十分準備されていないので、今後の課題かと思う。

教務課 早坂美春

学生さんたちが真剣に自分の学びや大学のことを考えていて素直に感心した。主体的な学びということで、学生自ら主体的に学んでもらうにしても、大学側の工夫・知的好奇心を呼び起こすためのタネマキが重要だと感じた。教務課としても、授業評価アンケートや空き教室の利用状況等は取り入れられる可能性があると思う。また、個人的に図書館のPOPがあれば楽しいと思った。誰が書くか、誰がススめるのか、どんな基準で選ぶのか等、疑問はいろいろあるけれど...

あたり前のことかもしれないけれど、「人の話をよく聞く」ということの大切さも改めて感じた。また、学生さんたちのプレゼンの仕方がすごく上手でわかりやすかったので、いい刺激になった。今日の発表の良いところを取り入れて、今後の業務を行っていきたい。

人間発達文化学類 3年 武田吉之助

(あらかじめ目標を低く設定しておいたので)「自分の考えをまとめ、人の考えを聞く。」という目標は概ね達成できた。さらに他の考えにより自分の考えを再考する...という時間的余裕があればよかったなと思う。

こういう場はきわめて有意義だと思った。4年間のプログラムの中に学生がみな(一度は)関わられるようなシステムが作られたらスバラシイと思った。いろいろな小さな単位で実現は不可能だろうか。(昔、教育学部などと言った頃、「クラス毎の合宿」みたいなものがあ

ったように思うが、そのような折の中心的なテーマとして扱うことができたらいいのかもしれない。) )

本当に価値ある2日間でした。(食事もりッチ！)

経済経営学類3年 荒川桃子

FD 合宿を通し、「主体的な学び」について定義や理想・現状について議論をした。主体性がある状態を達成するためには、社会的活動(社会性のある活動、たとえばゼミ、アルバイト、サークル等)に積極的に参加すること、それを補う役目としてコミュニケーション能力が求められることが挙げられた。

私が掲げた「6セメスターでこれまで以上の主体的な学びをするためにはどうすればよいかのヒントを得る」は、達成された。

具体的には、現実との結びつきを考えながら授業を受けること、何が分からないか疑問点を自分の中ではっきりさせること、ラーニングコモンズ等の活動エリアを積極的に利用することがヒントとして得られた。3年後期という大きな節目を迎える上で、もう一度“主体性を持って学修できているか”という問題を振り返ることができる2日間の研修は非常に有意義だった。他のグループ発表等で学んだことについても、6セメスターに生かしていきたい。

教育担当副学長 飯島充男

(1)主体的に考える力とは、「問い」を持つこと(学修時間や宿題ではなく)で、知的好奇心・知的欲求を高めることだとの提起は、ひとつの答えとして(これだけではないだろうが)参考になった。

(2)そのための方策として、各班からの提案で、意義深いと感じた点は、以下の3点。

授業アンケートについて、フィード・バックを可能にする方策として、様々な意見があった。匿名性をなくして、少し教員をホめるような回答に片寄ったとしても、当面は励ます意味で良いのかもしれない、等思ったところですが、今後慎重に考察したい。

教養演習のopen化の提案も意義深いものではと感じた。かつて学類の垣根を越えた担当の発想があったが、部分的な連弾的試行があるとうれしいか。

学生の施設に対する切実な要求にも、衝撃があった。空き教室、懇談・勉強スペース、坂が多くて滑りやすい(ペDESTリアン・デッキ) 除雪・除氷装置、コンセント、図書館のAmazon サービス、顕微鏡貸し出しなど。

うつくしまふくしま未来支援センター 村上寛和

(「主体的な」学びというものをどのように現実世界に位置づけていくか(位置づけられるか)ということが、本当に大切なことなんだと認識した。このことについて、大勢の人もそのように思っているということがわかったし、その分達成されていないことなのだ)

思った。

今回のFD合宿における関心は、政府が進めている大学改革の中に本学をどのように組み込むことができるか、ということだった。つまり、ミニ東大を目指すのではなく、本学だからこそ学生に提供できるものは何かを考えることであった。学生の側も、大学から何を受け取り、どのように学生生活を送ることができるかといったことを考えることであった。

今回のFD合宿を振り返って、両者は非常にリンクしていると思った。

ひるがえって本学だからこそ提供できるものは何かを考え、キーワードとして絶対にはずすことができないのは「震災からの復旧・復興」だと思う。このことを前面に推しだしながら、社会が求める大学として、本学の更なる発展を遂げていければいいと思った。

共生システム理工学類4年 関澤諒

主体的な学びを促していくためのアンをいくつも提示できた。グループのメンバーと同じような意見が多かったので、そこはもう少し独創的な案を出せればよかった。

活動を通して、グループ内の他学類生、教員、職員の話聞いた。授業内容についての話では、教える側がどういった考えを持っているのかが分かって良かった。

発表はぶっつけ本番だったので、その場でうまく話をまとめられなかったことが残念だった。場数を踏んで発表にも慣れるようにしたい。

FD合宿についてよくわからないまま参加したが、色々な立場の人の意見が聞け、価値あるものだったと思う。今回話し合った結果を反映して、今後の大学教育に生かせればいいと思う。

人間発達文化学類3年 糠澤摩美

学生・職員の方・教員の方の考えや、初年次教育の現状について率直に意見を言い合うことができ、自分の考えだけでなく、様々な立場の考えに触れることができた。特に、教員・職員の方の意見は普段なかなか聞くことができないため、新鮮であった。また、学生としての自分の意見も素直に発言することができたため、より自分の考えを深めたり、新しく気づいたりすることができた。

まとめの際も発表も、全員で協力して行うことができ、強調して今回のグループワークを行えたのではないかと思う。よって、今回のFD合宿の目標は殆ど達成できたと自己評価できる。

今回は、「主体的な学びとは？」というテーマで多くの方々の意見を聞いた。やはり、自分が考えていた「主体的な学び」とは異なる捉え方をしている方も居て、「主体性」についての新たな考え方ができるようになった。自分で目標・テーマを設定し学習していくということだけでなく、自己の時間の管理やあたり前のことをあたり前にこなすこと、周囲の環境など、「主体性」を実現するために必要な要素がたくさんあるということに気づけたことはとても有意義だった。

人間発達文化学類教授 牧田実

本音語りができた。いいグループワークだった。大学教育において、それぞれが自律性を高め、協力していくことが重要であるとあらためて思った。

教務課 木村勝典

「FD アンケート」について、「授業が終わってからの実施では意味がない」、WEB によるアンケートの回収率を上げるために、「単位取得には、アンケート提出を義務化する」など、学生視点での意見が聞けて、今後の実施に向けた検討材料になった。

グループワークや懇談等を通して、なかなか普段では聞けない学生の生の意見や考えを聞ける機会となり、FD 合宿研修に参加して良かった。このような機会をもっと増やし、また、多くの学生・教職員に参加をしてもらえたら、福大の将来は明るくなるような気がした。

人事課 佐々木敬規

答申で紹介されたような日本の問題など知識が増えた。担当している仕事柄、大学にいるのに教育問題に疎い所があるのを再確認した。

主体的な学びを実現するためには多くの課題があり、反論もあるとは思いますが、今回の意見を何らかの形で大学に反映してもらいたい。

先生の発言を的を射ている分、どうしてもグループの意見、あるいは全体の雰囲気も先生の意見に引っ張られがちになってしまった。的を外しても、もっと自分の考えを言うことが大切であり、個人的には反省点となった。

共生システム理工学類 4 年 岡部裕己

他の人の意見を聞き、自分の意見をまとめきれないことが多々あった。言うべきことは言うことができたかと思う。

他人の意見と自分の意見の照らし合わせの中で出てきた認識の違いなどについても、確認を行うことができた。

まとめきれなかった発言が口ごもってしまうこともあり、理解してもらえるように話せなかった部分がある。

人間発達文化学類 3 年 稲見尚

中教審の言う、学修時間の増加や課題を与えての学習は、社会に出て「役に立つ」人材を作り出すねらいがあるのではないか。大学での学びが社会に出て役立つものだと価値付けされた場合、学問は有益があるものになってしまう。それではそもそも学問の多くに関心が向かうことにならない。



主体性を持ち、学生が学ぶことのできる大学とは、社会の圧力からある程度切り離され、学問を価値付けるのではなく、問うことから生まれる知的な欲求などに視点を向けさせることが求められるのではないだろうか。

人間発達文化学類准教授 高橋由貴

主体性ということについて、4班のグループワークでは、異なる立場から話し合うことができ、また各セッションや休憩時間では有意義な意見交換ができた。このことの意義は大きい。大学内部にいる学生の実感と卒業した者の一致とずれ、教員・学生・職員の視点や求めるものの違いが浮かびあがった。「学習」と「教育」の理念・実質の差異などについても、もっと多様な立場でのすり合わせをするこのような機会が欲しいと思った。

教務課 岩下悟士

『主体性』という言葉が今回の研修での核である。二日間、主体性について考えたが、考えれば考えるほど、主体性とはなにか、主体性を学生に出させるにはどうしたらいいのが見えなくなっていった。

『やる気を出させる』というが、他者が能動的に働きかけて、やる気が起きても、それは主体性とは、また別物になってしまうのではないか。

結果はでないことだが、思考を深める作業をすることが研修の大事なことから、その点では有意義であったといえる。

共生システム理工学類4年 青山孝太郎

全体を通して、すごく有意義な時間を過ごせた2日間でした。目標に関しては、すべて達成できたと考えていて、自分の意見も積極的に出すことができた上、相手の意見もマンガラート用紙や話し合いを通してしっかり取り入れ、まとめ上げることができた。

感想として、今回初めてFD合宿というものに参加してみて、FDという言葉すら知らなかった自分が、FDについて今後も考えていきたいと思う程影響を受けました。残念ながら4年なので来年からは立场上参加できないが、また来たいと思う程でした。最後にリピーターの多いこのFD合宿も、毎年同じ人の意見よりも、もっと新顔の斬新な意見を求める為に、身近に呼びかけしたり、掲示板の隅っこに掲示するのではなく、(自分のようにFDの存在すら知らなくても、参加してみて新たな視点から意見を述べる事ができる人達を誘い込むために)もっと大々的に知らせていけば良いと思いました。

経済経営学類2年 荒木紗友里

グループワークでは、“教育・学修効果を高める授業アンケート”について話し合っていたので、自身が目標に掲げた「主体的に学ぶ際にどのように大学を活用できるかを考える」といったこととは少し違った視点だと思ったのですが、話し合いを進めるうちに、アンケ

ートも学生が学修をする上で大学という組織を活用している事例の 1 つなのだと考えるようになりました。学生が学ぶ上で感じたことを教員に伝えられるアンケートは、フィード・バックが学生の目に見える形で行われれば、学生にとっても大きな存在となると思います。なので、学生自身が意味を理解しないまま流れ作業でアンケートを回答している現状はとてももったいないなあと思います。学生と教員双方に有益となるアンケートの体制を考えていければと思いました。

他の班の発表を聞いていて、実現されればおもしろそうだなあと思う提案もたくさんあり、勉強になりました。特に図書館のアマゾン化やポップ・ディスプレイの話はぜひ実現して頂けたら楽しいと思うし、4 班の提案は、初年次にこだわらず、他の学年でも行って頂けたらいいなあと個人的に思いました。

共生システム理工学類教授 増田正

毎回の講義でアンケートを実施し、質問を受け付けて次回の始めに回答するスタイルを取り入れたい。

理工・第一専攻の創造工房の時間を利用してアクティブラーニングを試みてみたい。指示を与え過ぎないように心掛けたい。

卒研を主体的な学びと生涯学習に結びつけ結果として学修時間を十分に確保できるように試みたい(方策は不明)。

教務課 菅野晃

FD アンケートについて、かなり有意義な意見が聞けたと思う。特に「最後の講義で実施されても、自分たちにはフィード・バックされないのであまり意味がない」というのは目からウロコが落ちた思いだ。

普段の業務では分からない、学生の視点からの意見はとても参考になる。他にも、教務課に対するイメージや、掲示板の意見など今後の業務に生かせる話も聞いた。

中教審答申に対し学生・教員・職員の三者で共同で議論するというのも斬新に感じた。

今回は大変貴重な経験をさせていただきました。ありがとうございました。

共生システム理工学類 4 年 齋藤真吾

- ・ マンダラートという作業を初めて行い、有効的な作業であることを実感できた。
- ・ 派生させてるためには、単語を思い浮かべていく必要があると感じた。
- ・ 定義づけの大切さを学んだ。定義により見方や捉え方、方向性が決定。
- ・ 物事にはすべて正否が混在し、そのどれに重点を置く必要があるのかが重要。
- ・ なぜ? を明確にする必要があると感じた。
- ・ ゆっくり話す必要がある。
- ・ 否定ではなく肯定したのち、違う案を提示する。

・具体案の提示。

共生システム理工学類 2年 関原瑞穂

どちらかという反省というよりも、これからどうしたい、こういうのがあるといいという希望が多かったようにも思います。

しかし、話し合いを通して、やはり一番大事なのは自分と向きあってどう動いていくかしっかり意識して過ごすことだなあ、と思いました。

そういう面からは、これからの大学生活における過ごし方などに生かせること・実践できることを多く学べたのでとても有意義なものにすることができたと思います。

総合教育研究センター特任准教授 丸山和昭

プレゼンをうまくこなすについては、VTRの失敗から尾を引き、説明が雑になった。また、やりたいことが多すぎた。語るは少なく、考えるを多くするよう、練り直したい。大きな収穫である。

今後の仕事に生かせるアイデアについては、これ以上ないほどに得ることができた。参加者の皆に、深く感謝したい。

主体的な学びの問題意識は、予想を超えたが、VTRの効果が大きい。

施設課 横山雄司

目標達成状況として、私の達成度は70%くらいです。なぜかという、他人の意見を素直な気持ちを持って聞くことができたとは思いますが、それが私の中で全て理解されてはいなかったのではないかと感じるからです。そして、その意見が完全に理解されていたならば、自分なりにその意見に対し感じたことを積極的に話すことがもっとできたのではないかと思います。

不慣れな面も要因として考えられると思いますが、話し合う中で、もっと積極的な意見が述べられたら、もっと良い話し合いができたのではないかと思います。

総合教育研究センター特任准教授 渡部芳栄

企画・運営側として、「なるべく多くの人を楽しみ、かつ、目標に向かってすんなり話し合いが進むような進行・ファシリテーションができるようにする」という自分の目標を立てた。結果的には、良い話し合いになった気がする。

ただ、ファシリテーションの結果とは思えないし、各セッションの時間配分がこれで良かったかは不明（この後のアンケート結果による）。

(4)各班の話し合いの内容

\*\*\*\*\*

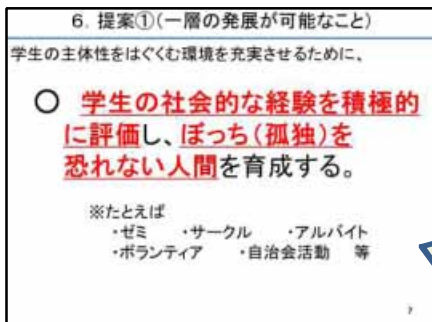
1班 学生の相互作用を促す学習環境とは



\* 1班では、学生の相互作用を促す学習環境について、「現状」「理想」「方法」について、“やる気のある人”、“やる気のない人”の二つの観点から、「行けば会える場所・集まる場所」の整備など、主体的な学びに向けた様々なアイデアが出されました。

\*\*\*\*\*

2班 学生の相互作用を促す学習環境とは



\* 2班では、学生の主体性をはぐくむために、「学生の社会的な経験を積極的に評価すること」をはじめ、「自己学習プログラム講師への職員活用」, 「空き教室の有効利用」など、相互作用を促進する学習環境の醸成に向けた多くの提案が出されました。

\*\*\*\*\*

3班 大学で学ぶ力を身につけさせる初年次教育とは

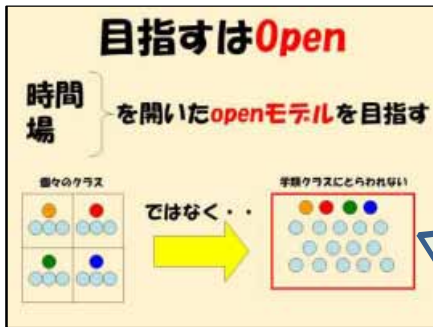


\* 3班では、“どうすっぺ?! 初年次教育”と題して、「学生を子ども扱いしない」, 「初めに厳しめの課題を課す」, 「大学生の生活時間に慣れさせるサポート」, 「授業の位置づけを明確にする」といった、一年生が学ぶ力を身につける方策が提案されました。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

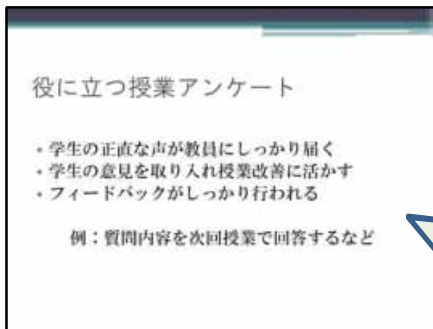
#### 4班 大学で学ぶ力を身につけさせる初年次教育とは



\* 4班では、“主体的な学びとは「問い」をもつこと”をキーワードとして、学類・クラスをこえて学生同士が「問い(自分の興味)」を話し合う経験、また“社会に出る”経験などを組み込んだ、Openモデルの初年次教育の在り方が提案されました。

\*\*\*\*\*

#### 5班 教育・学修効果を高める授業アンケートとは



\* 5班では、現状の授業アンケートについて“結果が反映されているか分からない”等の課題を整理した上で、教育・学修効果を高める改善案として「中間アンケート」、「アンケート意見の反映」、「大人数の講義のe-learning化」といった提案が出されました。

\*\*\*\*\*

#### 6班 学生の相互作用を促す学習環境とは

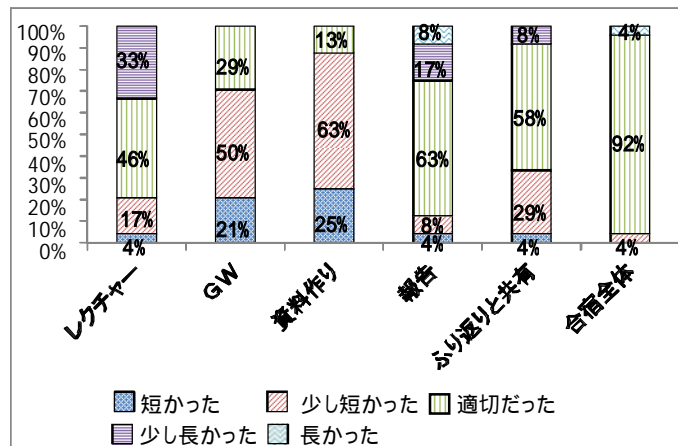


\* 6班では、主体性を促す学習環境の整備に向けて、施設環境、勉強スペース、ネットワーク整備(図書へのアクセス等)授業について、多様な課題と提案が出されました。たとえば、勉強スペース確保のためのS棟の空き教室の電光掲示などのアイデアです。

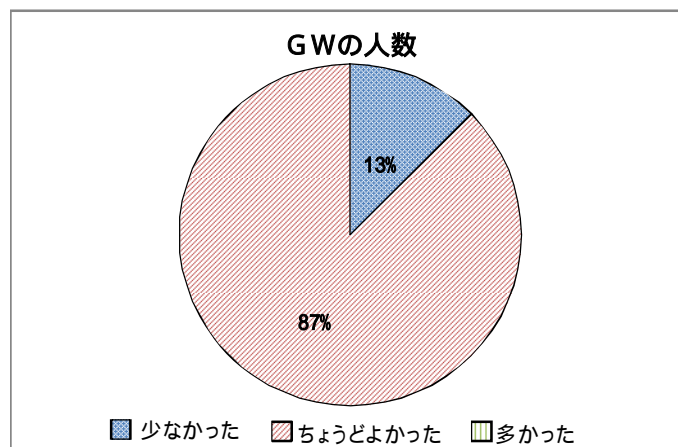
\*\*\*\*\*

(5)合宿時のアンケート

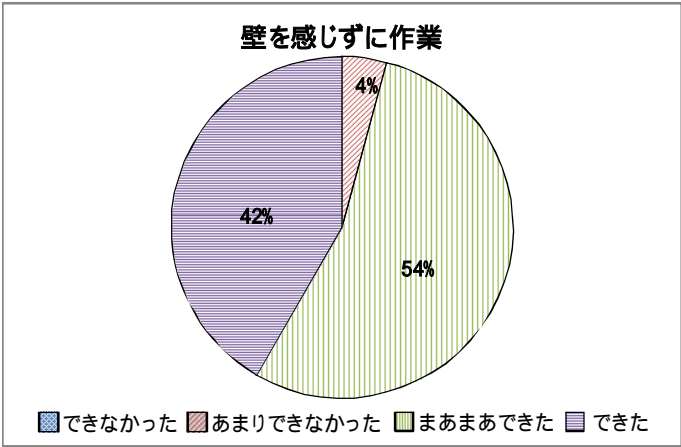
- レクチャー（第2セッション）の時間は適切でしたか。
- グループワーク（第3セッション）の時間は適切でしたか。
- 報告資料作り（第4セッション）の時間は適切でしたか。
- 報告（第5・6セッション）の時間は適切でしたか。
- ふり返りと共有（第7セッション）の時間は適切でしたか。
- 2日間全体で見た場合、研修の時間は適切でしたか。
- 1グループの規模（人数）は適切でしたか。
- 学生・教職員の壁を感じることなく、2日間を過ごすことができましたか。
- 明日からの業務・学修に役立つ発見や気づきがありましたか。
- 進行やファシリテーションの方法は適切でしたか。
- 全体的に見て、満足度のいく研修となりましたか。
- また参加したいですか。
- あなたの身分はどれですか。



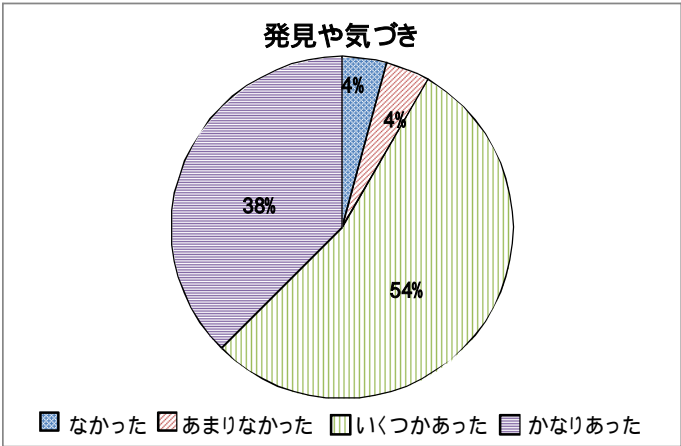
図表 1



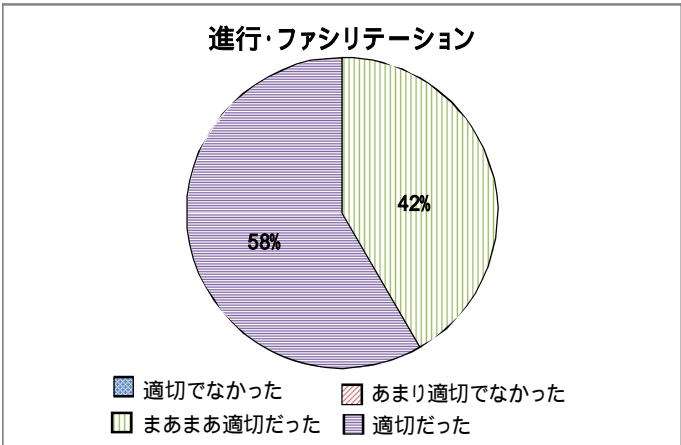
図表 2



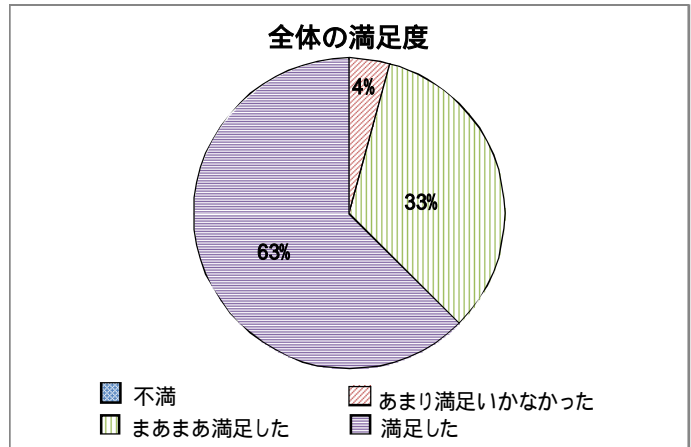
図表 3



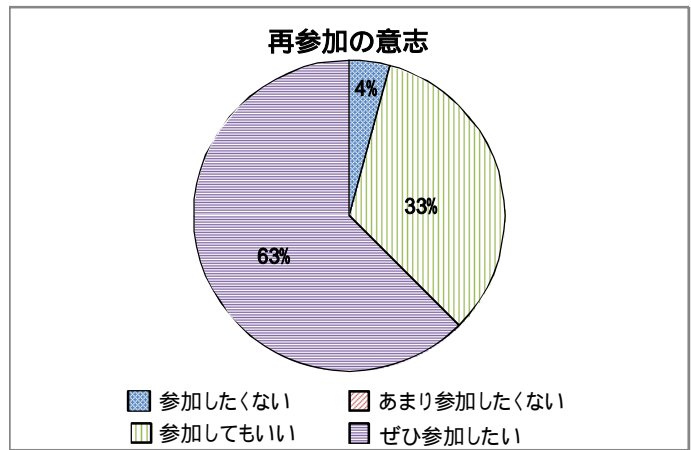
図表 4



図表 5



図表 6



図表 7





## FD 宿泊研修のまとめと課題

総合教育研究センター高等教育開発部門 渡部芳栄

今年度のFD 宿泊研修は、9月29日・30日の両日において、昨年度と同じ二本松市岳温泉『あづま館』で行われました。全体テーマを「大学における主体的な学びとは」と設定したのは、中央教育審議会答申のまとめを念頭に置いたものでした。しかし、それは答申の内容が素晴らしいとか、あるいは新しい考えで重要だといった意味ではなく、大学で学ぶには高校までの学びとは異なり、学生が自分自身で学びをデザインし、教職員はそれをサポートするという共同体としての大学での学び自体を再確認するのにちょうどよいタイミング（8月28日）で出されたという意味からでした。参加者は、教員8名、職員7名、学生12名の合計27名であり、各班がどんなまとめをし、また、各参加者が何を学び・感じたかは既に掲載した通りです。

今年度は昨年度と異なり、まず当部門の丸山特任准教授が中教審答申の全体像を解説した後で、具体的に3つのサブテーマ「大学で学ぶ力を身につけさせる初年次教育とは、教育・学修効果を高める授業アンケートとは、学生の相互作用を促す学修環境とは」に分かれて、グループワーク・報告を行いました。また、今年度においては時間管理をし、話し合いを促進する役割（ファシリテーター）を置いて進めたことも新たな試みでした。

また、この宿泊研修自体の課題を明らかにするために、2日目の最後にクリッカーを用いて参加者にアンケートを取ったこともこれまでになかったことです。アンケート結果は、前頁までに掲載されているグラフに示されている通りです。時間（質問～）に関しては、合宿全体でみるとほとんど全員が適切だったと答える一方で、各セッションで過半数が適切だと答えたのは「報告」「ふり返りと共有」だけでした（図表1）。合宿全体としては今年度と同程度の長さに保ちつつ、セッションの時間配分やプログラムの構成などは次年度の検討事項となるかと思えます。ただ、図表には示していませんが、身分別に見ると反応が異なっており、いずれに合わせるにしてもケアが必要となるでしょう。時間以外の質問（図表2～）は、概ねプラスの回答が得られており、グループワークで身分によって若干違いが見られる（図は割愛）ほかは、プラスとマイナスの逆方向への分散もさほど見られませんでした。継続してできる部分は、次年度にも引き継いでいきたいと考えています。

しかし、図表5を見れば明らかなように、“気を使った”回答がかなり数多く含まれている可能性の高い対面式アンケート、かつ、宿泊研修の最後の達成感（あるいは解放感）という特殊な雰囲気でのアンケートの回答であることには注意が必要でしょう。また、質問に含まれていないことについては、参加者の感想等を詳細に分析し次年度以降の宿泊研修に役立てていかなければならないと思えます。





## 6.各学類のFD活動

---

# 平成24年度学類ごとの取り組み



## 2012年度 各学類におけるFDの取り組み

### 【人間発達文化学類】

教授 牧田実

#### 学類

##### 1 FD研修会

- (1) 教養演習・基礎演習報告会(教育課程委員会)
- (2) 次年度教養演習・基礎演習担当者説明会(教育課程委員会)
- (3) 教養演習・基礎演習報告・意見交換会(教育課程委員会)

##### 2 FD調査

- (1) 「教養演習」「教養演習」「基礎演習」実施概要調べ(教育課程委員会)
- (2) クラスにおける学生指導に関する実態調査(前期)(教育課程委員会)
- (3) クラス・ゼミにおける学生指導に関する実態調査(後期)(教育課程委員会)
- (4) 新入生入学動機アンケート調査(教育課程委員会、将来計画検討委員会)
- (5) 学習と生活に関するアンケート調査(全学類生対象)(教育課程委員会、将来計画検討委員会、学生生活委員会)

##### 3 授業公開および検討会(FDプロジェクト)

- ・実施日：2013年1月10日(木)
- ・授業提供者：三宅正浩准教授
- ・授業科目：社会と人間

#### 研究科

- 1 新入院生アンケート調査(教育課程委員会)
- 2 研究発表状況等に関する調査(教育課程委員会)
- 3 学業の成果および修了研究についての調査(教育課程委員会)

### 【行政政策学類】

教授 福島雄一

#### 1. 学類

少人数教育を重視する観点から、教養演習(学類)、専攻入門科目(学類)、専門演習(学類・現代教養)、基礎演習(現代教養)の担当教員にアンケートを実施し、ゼミの運営等につき、工夫した点、問題点、課題などに関して調査をし、集計後に懇談会を実施して、今後の参考となる点につき、意見交換をし、得られた情報を学類所属教員にフィードバックして共有している。

新入生に対して、アンケートを実施し、新入生が本学類の教育・大学生活にどのような期待・要望を有しているかを調査した。

教養演習の授業の一環として、新入生を対象として入学直後の4月に1泊2日の日程で、「新入生合宿ガイダンス」を行った。事前に上級生との打合せ、事後に反省会を行い、学生の自主性を尊重した運営がなされている。

## 2. 地域政策科学研究科

研究科の修了時・修士論文提出時に、アンケートを実施し、大学院生の指導の充実に役立つ情報を収集している。

### 【経済経営学類】

教授 藤原一哉

学部時代から「卒業予定者アンケート」を実施している。卒業研究を教務課に提出する際に合わせて提出させていたので、回収率は100%であった。この方式を学類移行後も踏襲している。アンケートの内容は、入学から卒業までの教育について全て網羅している。各授業のアンケートと重複しないように、卒業時に振り返って、「(学生の)講義への取り組み」、「(教員が使用した)教材のレベル」、「(語学の場合は)語学力が身に付いたか」、「(専門科目の場合は)専門知識が身に付いたか、科目構成の充実度」などが聞かれている。さらに、専門演習と卒業論文についても満足度と学生の姿勢、得られたもの等が聞かれている。卒業予定者アンケートでは、履修に関する諸制度の在り方についても聞いているが、FDとは直接関係ないので省略する。

もう一つの中心的アンケートは、2年生の後期に全員に問うもので、その内容は、学類移行後の1年生と2年生前期までの自己デザイン領域(教養演習、キャリア形成論、キャリアモデル学習)、学類抛出の学群共通科目、リテラシー、同に関するものである。必修科目である経済外国語基礎(日本人学生は英語で、留学生は日本語)の時間でこのアンケートを取るため、回収率は高い。アンケートの順番は、学群共通科目から始まる。というのは、この科目が実質的にリテラシーの最初に来る科目であるからである。そして、各授業アンケートと重複しないように、各科目についての理解度、興味・関心、(学生の)取り組み、講義で得られたものである。

この2つのアンケートを基にして、専攻ごとグループごとに教員が集まり、教育改善のために議論し、その内容をまとめて、学類の「日常的自己評価報告書」を刊行している。この報告書には、アンケートの生データも「自由記述」も含めて掲載されている。

さらに、この報告書には、「経済英語基礎」、「外書講読」、「大学院修士論文の中間報告会」に関する教員向けアンケートも掲載されている。詳しくはこの報告書を参照されたい。

### 【共生システム理工学類】

教授 神長裕明

理工学類のFDの具体的な取り組みとして、教養演習が挙げられる。教養演習の実施前に、

アドバイザー教員9名が集まり、初年度教育としての教養演習Iを有意義なものとするために、現状の反省を踏まえて意見を出し合い、それらを参考にして授業を実施している。この結果、研究室を訪問して学類の教員や研究室への理解を深め専門性への意識付けを行ったり、課題やテーマを見つけて調査・研究し、発表練習を行う等、通常のカリキュラム内容を補うような授業内容となっている。

大学院においては、研究プロジェクト型実践教育推進センターが主体となって、FDアンケートを実施している。大学院の授業は受講者が少ないので、個人を特定しやすく、アンケート結果の公表や活用の仕方が課題となっている。

今年度、将来構想検討委員会に「教育の質保証ワーキンググループ(WG)」を設置(H24.9~)し、検討を始めている。WGでは、教育の質保証への具体的対応について議論し、2013年2月に、理工将来計画委員会に対して中間答申を行った。答申では、入学時、初年度教育、基礎教育、研究室配属と卒業研究、全学年を通した教育というように時系列的に問題点を整理し、短期的、中期的な改善策を提案した。さらに、大学院での教育や教員養成についても検討を行った。WGでは、今後さらに検討を続けて、具体的な改善の実施方法等について検討していく予定である。







## 7. LiveCampus を利用した中間アンケートの試行

---

# LiveCampus を利用した 中間アンケートの試行



## LiveCampus を利用した中間アンケートの試行について

総合教育研究センター高等教育開発部門 渡部芳栄

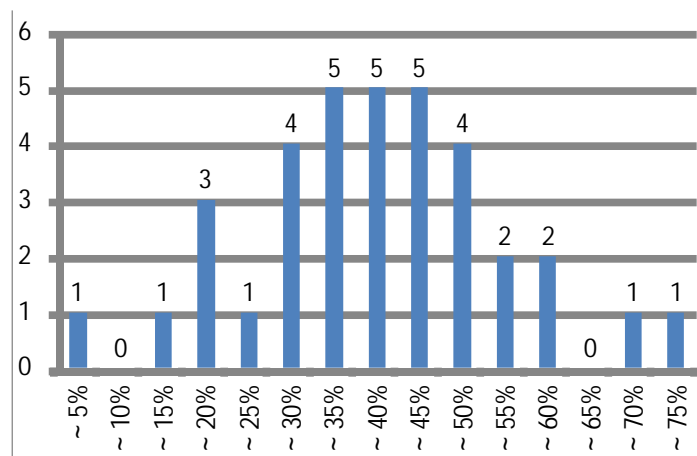
### (1)試行のまとめ

2012 年度の年度計画にて「学生アンケートの実施方法を現在の紙ベースから WEB ベースへの移行を含め検討改善する」ことが目標とされたことを踏まえ、今年度の FD プロジェクトでは授業アンケートの WEB 化が中心的に議論・検討されました。

本学では今年度より、教務システムとして LiveCampus を導入しており、このシステムにはアンケート機能が実装されています。そこで、この機能を利用することを前提に、考えられる課題や他大学での事例等を収集してきました。議論・検討の結果、現行のセメスター末に実施している授業アンケートを一気に WEB 化することへの不安や課題が多いことから、例年少数ながらも実施している中間アンケートのみ LiveCampus 上で試行することといたしました。なお、中間アンケートを行うことは、昨年度及び今年度の FD 合宿での学生の意見（アンケートに記入した意見が反映されない、など）へ対応する意味でも有効な手段でもあります。

試行の状況と概要は、以下の通りです。

- 1)実施日時：2012 年 11 月 15 日～2012 年 12 月 14 日
- 2)実施科目数：42 科目（対象者が 10 人未満の科目を除く場合：35 科目）
- 3)実施対象者数：のべ 2021 人（対象者が 10 人未満の科目を除く場合：1994 人）
- 4)提出者数：のべ 760 人（対象者が 10 人未満の科目を除く場合：750 人）
- 5)平均回収率：37.6%（対象者が 10 人未満の科目を除く場合：37.6%）
- 6)最大値：85.7%（対象者が 10 人未満の科目を除く場合：73.7%）
- 7)最小値：0%（対象者が 10 人未満の科目を除く場合：5.0%）
- 8)回収率分布（対象者が 10 人未満の科目を除く。）



LiveCampus による中間アンケートの試行は、11月中旬から12月中旬にかけて行われました。その結果、実施科目42、実施対象学生数2021人(のべ)、回収率は37.6%であり、紙で行う授業アンケートの回収率より低い結果であり(平成23年度後期の授業アンケートの回収率は全体で61.4%)、前頁のグラフの通り、30~50%の回収率の科目が多かったようです。

## (2)試行に関するアンケートのまとめ

LiveCampus による中間アンケートを実施した教員に対しては「LiveCampus を利用した中間アンケートに関する調査」を行い、8名の教員から回答を得ました。そのうち、本報告書への掲載を許可して下さった先生方のご意見を、以下に掲載いたします。

### アンケート項目

1. LCで授業アンケートを実施する利点や課題について、ご自由にお書きください。
2. 今回の試行の際に、回収率を上げるために工夫した点、回収率改善のための課題について、ご自由にお書きください。
3. LCを利用した授業アンケートの実施の可能性について
4. その他、LCを利用した授業アンケートについて、ご自由にお書きください。

### 回答内容

1. LCで授業アンケートを実施する利点や課題について、ご自由にお書きください。

#### **利点について**

- ・迅速な集計、(公表する場合)LCにおける公表が容易。
- ・学生の利用率が低い。
- ・集計が早い。集計に要する人件費が削減できる。
- ・入力、集約の手間が省ける点。
- ・よい方法だと思います。
- ・実施コストの軽減。フィードバック(回答結果の確認)の早期化。
- ・学生の考えが理解できて、すぐに今後の授業に反映できるため、とてもよいと思います。
- ・紙ベースだと目茶苦茶にアンケートに答える学生は、わざわざLiveCampusにアクセスして目茶苦茶に答えることは少ないと思うので、目茶苦茶にアンケートに答える学生をある程度排除しうることも考えられ、その点でもとても良いと思います。

#### **課題について**

- ・回収率、授業に出席していない者の不真面目な回答。
- ・授業時間内に携帯端末を使って学生がその場で回答できるなどの工夫をしなければ、高い回収率は見込めない。
- ・見ている学生とまったく見ていない学生と別れていて、自分もLCを使用してもなかなか

伝わらない。

- ・記述式の回答を得るための設問を十分に設定できないこと。授業に出てきている学生を選んで回答してもらえないこと。
- ・自由記述記入の利便性向上（携帯電話からも記入できるようにする）

2．今回の試行の際に、回収率を上げるために工夫した点、回収率改善のための課題について、ご自由にお書きください。

#### 工夫した点について

- ・それほど手間がかかる作業ではないことを説明。
- ・口頭だけでなく、授業用のパワーポイントのスライドの最後にも掲示して呼びかけた。
- ・中間アンケートの実施の告知を含めて、3回ほどアナウンスした。
- ・特に行っていません。
- ・特に工夫はありませんが、講義中本アンケートについて学生にアナウンスした際に「この意見によって講義内容を改善するので是非出してほしい」旨の発言をしました。
- ・早い段階での実施の周知。複数回にわたってのアナウンス。

#### 回収率改善のための課題について

- ・結果として、回収率は平均よりも低かった。学生が LiveCampus を必ず見るような工夫（例：小テスト問題を LiveCampus からダウンロードさせる）とセットにするなど工夫しないと、回収率を上げるのは難しいと思われる。
- ・講義時間内で回答できるよう、携帯電話からの記入を可能としたうえで、実際に記入を行うための時間を、講義終了後に設ける。
- ・無理に回収率をあげなくてよいとおもいます。意見がある学生、まじめに答える学生が回答すれば十分だと思います。

3．LCを利用した授業アンケートの実施の可能性について

- ア 期末・中間ともに利用可能：6名
- イ 中間のみ利用可能：0名
- ウ 期末のみ利用可能：1名
- エ 期末・中間ともに利用不可能：0名

4．その他、LCを利用した授業アンケートについて、ご自由にお書きください。

- ・期末の方は、授業時にフィードバックするタイミングがないので（教員と顔を合わせるタイミングがないので）、回答率は中間に比べて低下してしまうと予想する。
- ・LCの効果的な活用が今後さらに必要かと思えます。授業連絡は連絡、アンケートはアンケート、結果は紙媒体・・・だけでなく、アンケート結果を電子データとして、教員も活用できるようなものにしたい。授業でその結果を履修している学生に見せてお互いに

授業の在り方を考えてよい誦号を作っていきたい。

- ・利用は可能だと思うが、回収率がネックとなるため、かなりの工夫を要する。
- ・中間アンケートの結果を学生にフィードバックする際に、結果を簡潔に示すため、自分で平均点を算出した。期末のアンケートと同様に、平均点の算出まで処理した上で教員に通知してもらえるとありがたい。
- ・WEBアンケートの利点を生かし、設問を各授業担当者がある程度自由に設定できるようにする。
- ・WEBアンケートの利点を生かし、回答情報を学生別に蓄積する(何を学んだか、など)。
- ・記名式アンケートへの移行を検討(回答に責任を持たせるほか、他のアンケートとの接続に必要)。

### (3)今後の課題

授業アンケートの改訂は、昨年度からの継続審議事項でありました。昨年度は「質問項目」「活用方法」「実施方法」の3つの改訂を一度に実施しようとした結果、年度末になっても議論がまとまらなかったことを踏まえ、まず「実施方法」のWEB化から着手しようとした経緯があります。WEBアンケートの試行につきましては、次年度においても継続することを予定しておりますので、今後のWEB化の本格的検討のためにも、ご協力方よろしくお願いいたします。

一方で、現行の授業アンケートについては、「3つの自由記述部分が同じようになってしまおう」「筆記の欄が多い」「もっと細かな点を入れて欲しい(声の大きさ、配布資料の適切性、学生の理解度の把握など)」「(2011年度FD宿泊研修より)などの声も挙げられており、「質問項目」の内容の見直しも必要かと思えます。また、今年度のFD宿泊研修でも「中間アンケート」「アンケート意見の反映」といった意見が出されるなど、「活用方法」の見直しも併せて行わなければならないでしょう。次年度以降、FDプロジェクトの機能を引き継ぐ教育企画委員会にて、抜本的な見直しも含めて検討していかなければならないと考えます。